札幌市の学校検尿の成績と課題

札幌市医師会／札幌市学校医協議会検尿判定委員会
星井　桜子、荒木　義則、佐野　仁美、八十嶋弘一

はじめに

札幌市の学校検尿は小中高校生と公立幼稚園児を対象に行われ、その成績は札幌市教育委員会から、学校保健統計調査[1)]として毎年発刊される。今回、主に2019年度の成績について要約し、検討する。

Ⅰ．札幌市の学校検尿判定方法

尿潜血、尿蛋白は、一次検査で試験紙（＋）以上を陽性とし、陽性者に二次検査を行う。二次検査で陽性の場合、同じ尿を用い、尿沈渣赤血球数と白血球数、蛋白定量を行う。要精検の判定基準は、赤血球≧５個/視野、白血球≧10個/視野、蛋白定量≧30mg/dlである[2)]。尿糖は、一次検査陽性者で糖定量を行い、50mg/dl 以上を要精検とする。

ⅡⅠ．札幌市学校在籍者数と受検率

2019年札幌市学校在籍者数は140,846名である。少子化が進んでいるが、その減少速度はここ数年はやや緩くなっている。学校検尿の受検率は、例年と同様、99％と高率であった。

Ⅲ．一次、二次、三次陽性率と要精検率

2011 ～ 2019年の一次、二次、三次陽性者数を示した（**図１**）。毎年ほぼ同様の傾向が見られる。

2019年の一次受検者における陽性率は3.5％、二次受検者における陽性率は9.3％、三次受検者における要精検率は62.1％だった。総受検者に対する要精検率は全体で0.35％、小学生0.24％、中学生0.53％、高校生0.56％だった。また、精密検査受検（病院受診）率は全体で69％と、例年同様であった。

Ⅳ．　二次陽性者の血尿、蛋白尿異常の割合（図２）

全体では潜血のみの陽性は約52.9％、蛋白のみの陽性は約43.6％、蛋白と潜血ともに陽性の場合は約3.5％であった。小中学校では血尿のみの陽性者の割合が高く、蛋白尿陽性の割合は中高校生になるにつれ高くなった。

Ⅴ．血尿・蛋白尿陽性者の病名

無症候性血尿および家族性血尿が42.6％と最も多く、つづいて腎尿路異常などの先天性疾患14.8％、無症候性蛋白尿および起立性蛋白尿11.3％、腎炎11.8％、ネフローゼ症候群11.3％であった。

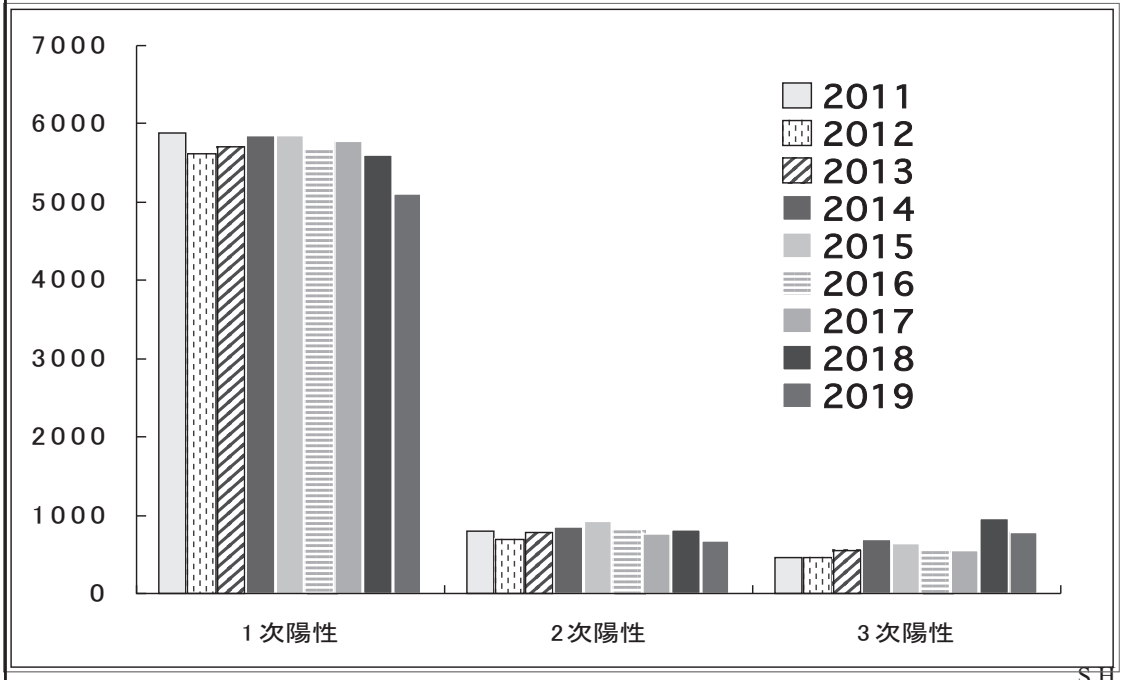
おわりに

札幌市の学校成績を要約した。2019年度の成績はほぼ例年同様であり、学校検尿により、腎疾患の早期発見への寄与が示唆された。

文献

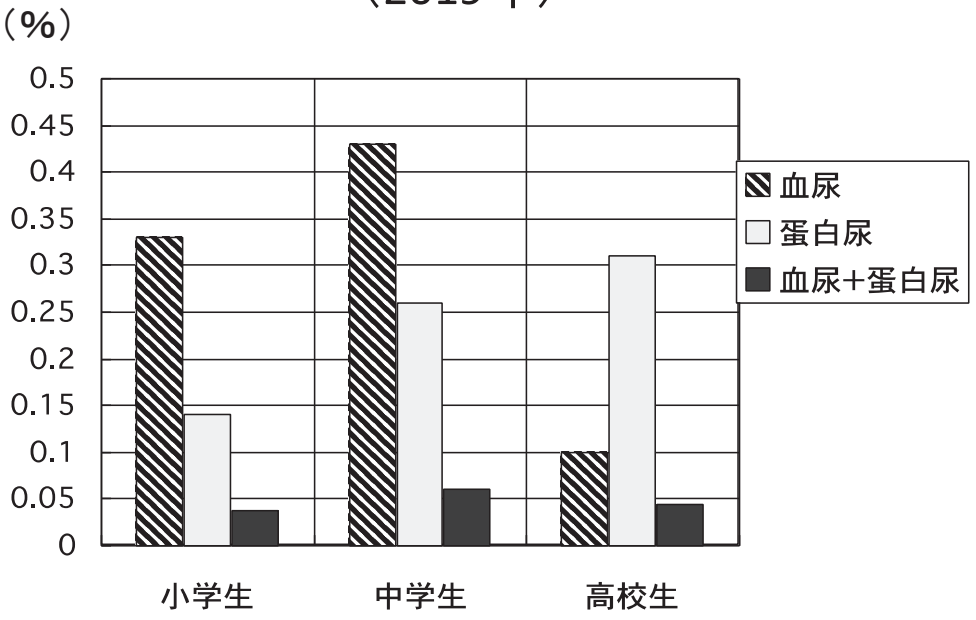
１）学校保健統計調査．札幌市教育委員会生涯学習部保健給食課.
２）星井桜子他，札幌市学校検尿成績と学校生活管理表の変更について．札幌市学校医協議会だより第19号、p39 ～ p40, 2012.

図1　札幌市学校検尿陽性者：
1次・2次・3次検査陽性者（2011-2019年）



S.H

図2　札幌市学校検尿：各尿異常者の割合
（2019年）



S.H